

海洋生物シンポジウム2025

主催：日本海洋学会海洋生物学研究会 共催：日本プランクトン学会・日本水産海洋学会

日時 | 2025年 3月 17日 (木) 9時～

場所 | 東京海洋大学白鷹館 1階講義室 / オンライン開催 (Zoom使用)

プログラム

■ 海洋生物学研究会会長挨拶 高木 悠花

■ 日本海洋学会会長挨拶 江淵 直人

■ 基調講演

時間	発表者	演題
9:10-9:40	Nishihara, Gregory N.	藻場における海洋ごみの脅威
9:40-10:10	長谷川 万純	ロドプシンから探るシアノバクテリアの多彩な光利用戦略

■ 一般講演

座長	時間	発表者	学生	演題
座 長 1	10:25	岡本 諭賢	✓	海洋微生物のエアロゾル移行に着目した大気海洋境界の菌叢解析
	10:40	脇 敬太郎	✓	西部北太平洋における窒素固定を駆動する微生物群集動態
	10:55	高柳 茜	✓	グライコミクスを用いた海水中の糖鎖解析
	11:10	宮園 健太郎	✓	日本近海表層のプラスチックごみ付着生物相の解明
座 長 2	11:25	森本 冬海	✓	魚類のDHA蓄積へのラビリントウ類の影響
	11:40	丸田 智毅	✓	共生藻に着眼した浮遊性有孔虫 <i>Globigerinella siphonifera</i> の分子系統解析
	11:55	宮本 祐成	✓	浮遊性有孔虫群集を制御する環境要因及びタンパク質バイオマスとしての存在量評価

12:10～13:30 昼休憩

座長	時間	発表者	学生	演題
座長3	13:30	船木 千帆	✓	西部北太平洋における混合栄養性無殻繊毛虫の分布生態
	13:45	嶋田 蓮	✓	混合栄養性ハプト藻 <i>Phaeocystis antarctica</i> とクリプト藻 <i>Geminigera cryophila</i> の温度による増殖速度と光合成特性の変化
	14:00	樋下 未感	✓	海洋植物プランクトンの暗所における栄養塩消費と生存戦略
	14:15	住吉 大	✓	秋季太平洋側北極海における植物プランクトン群集：海氷融解遅延の影響
座長4	14:30	平川 皓稀	✓	安定同位体比分析から示唆されたハマトビウオの別回遊群の存在
	14:45	堀口 祐輔	✓	AI位置座標解析とバイオセンサを用いた魚類のストレス応答解析
	15:00	伊藤 進一		中規模渦と全球規模の漁場形成
	15:15	土井威志		サンゴの大規模白化指標(Degree Heating Week)の季節予測
15:30～15:45 休憩				
座長5	15:45	堤 英輔		2024年夏季宇和島市下波湾沖における急潮の観測
	16:00	岡 英太郎		学術変革領域研究A「ハビタブル日本：島嶼国日本の生存基盤をなす大気・海洋環境の持続可能性」
	16:15	山口 凌平		近年の黒潮続流の顕著な北偏と「ハビタブル日本」における取り組み
座長6	16:30	野坂 裕一		2023年春季親潮と親潮—黒潮混合域におけるゲル状粒子濃度
	16:45	有馬 大地		PlanktoScopeを用いたマイクロプランクトン群集構造解析：特に宗谷暖流域の大型珪藻について
	17:00	菅井 洋太		黒潮亜熱帯域における原核生物・真核微生物の群集構造および分布パターン
	17:15	藤木 徹一		光に満ちた海洋表層でのUV防御戦略：共生生態の新たな視点
17:30～ 閉会式・学生優秀発表賞表彰				

18:30～ 懇親会（生協食堂）

基調講演

Nishihara, Gregory N.

長崎大学 海洋未来イノベーション機構 環東シナ海環境資源研究センター

タイトル：藻場における海洋ごみの脅威



内容

環境汚染、生物多様性の喪失、気候変動は、「地球の健全性 (planetary health)」を脅かす3つの主要な脅威と考えられます。特に、プラスチックごみなどの海洋ごみは、分解されにくく環境中に蓄積し続ける深刻な問題である。プラスチックごみは藻場やサンゴ礁などの沿岸生態系に蓄積した場合、生育空間を巡る競争が生じたり、海草やサンゴの光合成が阻害されたり、物理的な損傷が引き起こされたりする可能性があります。これらの影響により、生態系機能の低下が懸念されます。この講演では、長崎県五島列島・有川湾における海草藻場の生態系機能に対し、海洋ごみがどのような影響を及ぼしているのかを紹介します。

長谷川 万純

海洋研究開発機構 超先鋭研究開発部門

タイトル：ロドプシンから探るシアノバクテリアの多彩な光利用戦略



内容

海洋生態系を支える一次生産者・シアノバクテリアは、多様な生息環境で効率良く光を利用するために、吸収波長の異なるクロロフィル色素を進化させてきた。一方で、「微生物型ロドプシン」の発見とゲノム情報の蓄積により、微生物の光利用機構がこれまで考えられていた以上に多様であることがわかってきた。本講演では、シアノバクテリアの進化と環境適応の軌跡に関わる、新たなキープレイヤーである「ロドプシン」に関する最近の研究成果を紹介する。